

# 震災後に 芽生えたもの Ⅲ

## 「震災の記録碑」 未来の子どもたちに震災の記録を伝えて、 尊い命を守りたい

「この場所まで津波が来たんだよ。信じられる？」  
「津波はあの高さまであったんだって」  
「こんな会話が子どもたちの間で交わされ、震災が語り継がれることを願い、  
地元の青年経済人たちが、震災を語り継ぐ石碑を建立しました。」



＜震災の記録碑＞除幕式



＜震災の記録碑＞JR本塩釜駅アクアゲート口



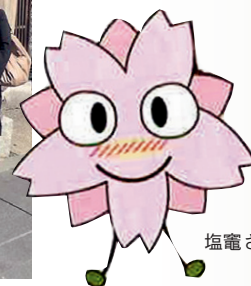
＜震災の記録碑＞ふれあいエスブ塩竈



＜震災の記録碑＞北浜公園



＜震災の記録碑＞西町・荻原商店前



塩竈さくらん

平成24年10月20日、JR本塩釜駅のアクアゲート口で（震災の記録碑）の除幕式が行われました。主催したのは地元の青年経済人を会員とする塩釜商工会議所青年部。石碑は同部の設立30周年記念事業として建立されたものでした。

記念事業推進本部で本部長を務めた千葉誠さんは、事業の開始当初を次のように振り返ります。

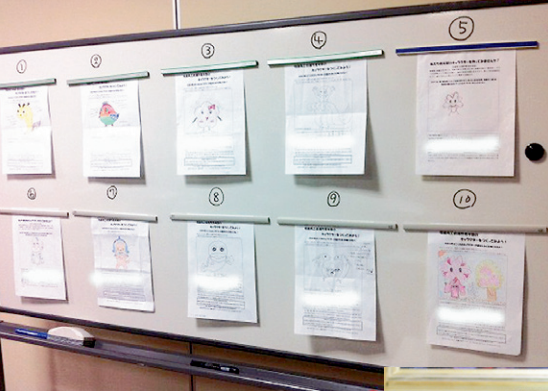
「準備は震災の年の夏からでした。それまでは炊き出し支援や救援物資の配布活動があり、また、被災したメンバーに連絡がつかなかったり、事業の再開で忙しかったり。そこへ『塩竈みなと祭』の準備なども重なり、記念事業推進本部の会議もなかなか開けませんでした」

自らも仲間も、そして地域の人々も、誰もが震災から立ち上がろうとしていた夏でした。

記念事業の具体的な実施内容を話し合う中で、「何か震災に関係するコトやモノを」という方向性は自然なものだったそうです。そして、何度かの会議を経て、「震災を風化させることなく、塩竈の未来を担う子どもたちへ贈るメッセージ」とし



震災直後にJR本塩釜駅前で実施した、支援品の配布



会議の場に掲示された応募作品。メンバー全員の投票によって入選作品が選定されました。審査に当たっては著作権や肖像権を侵害しないよう、慎重に確認作業が行われました

設立 30 周年記念事業推進  
本部・本部長の千葉誠さん



推進本部の阿部眞喜さん



平成 26 年度青年部会長の  
阿子島徳裕さん



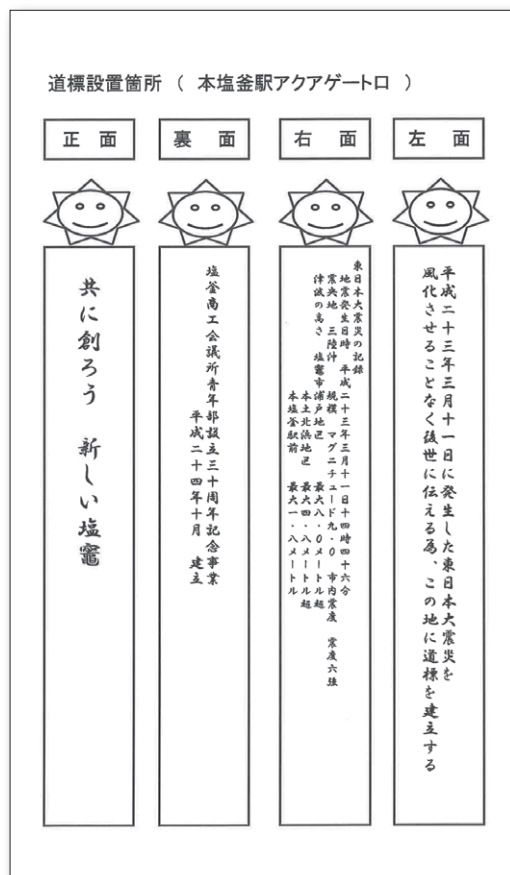
推進本部の牧野仁美さん



2 市 3 町（塩竈市、多賀城市、松島町、利府町、七ヶ浜町）  
の子どもたちから集まった約 300 点の応募作品

て石碑（震災の記録碑）を建立すること  
が決定したのでした。  
「子どもたちに塩竈をもっと好きになっ  
てもらいたい」。そんな思いから、石碑  
に刻む青年部のイメージキャラクターと  
キャッチフレーズを子どもたちから公募し  
ました。図書館や駅、市民まつり会場など  
限られた場所での告知にもかかわらず、平  
成 24 年 4 月から 6 月 24 日までの短期間で約  
300 点もの作品が集まりました。  
審査の結果、イメージキャラクターは  
第三小学校（当時）の中田共くんの「塩  
竈さくらん」が、キャッチフレーズは月  
見ヶ丘小学校（当時）の笹原萌絵さんの  
「しんせん、たんけん、だいすき塩竈」が、  
入選作品に選ばれました。  
推進本部のメンバーだった阿部眞喜さ  
んは「どの作品も塩竈らしさが感じられ、  
それぞれ魅力的。審査ではとても困りま  
した」と、また、牧野仁美さんは「応募

の 9 割は市内の子どもたちでした」と語  
ります。入選作品はお二人や千葉さんを含  
むメンバー全員の投票によって選定され  
たそうです。  
石碑（震災の記録碑）の正面には、「共  
に創ろう 新しい塩竈」という未来へ向  
けた呼び掛けが刻まれています。  
石碑は、塩竈の玄関口である JR 本塩  
釜駅アクアゲート口のほか、被害が大き  
かった地域にある北浜公園、多くの子ど  
もたちが利用するふれあいエスプ塩竈、  
市街地を襲った津波の到達点である西町・  
荻原商店前と、市内の 4 力所に設置され  
ました。  
それぞれに特徴があり、例えば北浜公  
園の石碑は頭頂部の位置（高さ）が津波  
の浸水高を示しています。荻原商店前の  
石碑には「東日本大震災による津波この  
地点まで到達する」と刻まれています。「地  
域の未来に夢を抱いてほしい」「震災の記



JR 本塩釜駅アクアゲート口の石碑に刻まれた東日本大震災  
の碑文



恒例の「市民まつり」も塩釜商工会議所青年部の  
主催。毎年、「ジャンボ鉄火巻」などを楽しみに訪  
れる多くの来場者にぎわい、たくさんの方の笑顔で  
あふれます

録を伝えて尊い命を守りたい」。4 つの石  
碑には子どもたちに向けたそうした願い  
が込められているのです。  
「震災で生まれたものは他にもある」と  
教えてくれたのは阿部さん。震災後に始  
まった、塩竈東松島の子どもたちと京都・  
神戸・淡路の子どもたちの交流事業に携  
わっているそうです。事業は 3 年目を迎  
え、企業やプロサッカークラブなど協賛  
いただける団体が増え、交流プログラム  
の充実とともに、「遠く離れた地域の子ど  
もたちと結ばれた絆はますます強くなっ  
てきている」と語ります。  
地元の青年経済人が子どもたちに寄せ  
る熱い思いは石碑の完成後も途切れるこ  
とはなく、贈るメッセージにはまだまだ  
続きがあるようです。

# 街の記憶 Ⅲ



夕暮れの塩釜港（昭和52年）



千賀の浦（平成10年）



新河岸（本町・宮町）（平成13年）



夕暮れの塩釜港（昭和59年）

# 資料編